



筑摩世界文學大系

31

ゴーゴリ レールモントフ

横田 瑞穂 服部 典三 訳
野崎 韶夫 北垣 信行



タラス・ブーリバ 狂人日記 鼻 外套
検察官 死せる魂・第一部
現代の英雄

筑摩書房

筑摩世界文學大系 31

昭和四十八年七月二十五日

初版第一刷発行

ゴーゴリ レールモントフ

訳者代表

横田瑞穂

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷

三晃印刷

製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20631 (出版社) 4604

目次

ゴーゴリ

タラス・ブーリバ

服部典三訳 5

狂人日記

横田瑞穂訳 89

鼻

横田瑞穂訳 105

外套

横田瑞穂訳 123

検察官

野崎韶夫訳 146

死せる魂・第一部

横田瑞穂訳 199

レールモントフ

現代の英雄

北垣信行訳 369

偉大なユーモリストの悲劇

コロンソコ 服部典三訳 469

年	解	レール	近代の例証としてのゴーゴリ
譜	説(ゴーゴリ)	モントフのユーモア	P・ラー
	(レールモントフ)		富士川義之訳
		川端香男里訳	482
		横田瑞穂	491
		北垣信行	504

ゴ
丨
ゴ
リ

タラス・ブーリバ

—

「おい、ちょっと後ろむきになってみる、倅こが！
おまえ、なんておかしな格好をしてるんだ！
おまえたちの着ている坊主の不斷着（袈裟の下にウイグ）みたいなものなんじゃ？ 神学校（一九一五年）に創立されたウクライナ地方最初の高等教育機関では、みんな、そんな服を着ておるのか？」こういう言葉で、老いたるブーリバは自分の二人の息子を出迎えた。二人はキエフの宗教学校（キエフのアカデミヤの民間の俗人の者も教）に学んでいて、父のもとへ帰ってきたのだ。

彼の息子たちは、たったいま、馬から下りたところだった。二人ともがしりした若者で、卒業して間もない神学生らしく、まだ上目づかいに人を見るくせがあった。彼らのしつかりして頑丈そうな顔は、まだ一度も剃刀を当てられなかったのない産毛でおおわれていた。彼らは、父親のこういう歓迎ぶりにすっかりどぎまぎして、地面に目を伏せたまま、身じろぎもしないで立っていた。

「待て、まて！ わしにおまえたちをとつくり

と眺めさせてくれ」と、彼は二人をぐるりと向き直らせながら続けた。

「なんとまあ長つたらしい着物を着こんだもんだ！ えらい長上衣（ウクライナの農民の半）があったもんじゃ！ こんな長上衣には、まだこの世でお目にかかったこともないな。ところで、おまえらの中のどっちか一人、ちょっと駆け出してみる！ 裾に足をからませて地面にぶったおれやせんか、ひとつ見物してやろう」

「笑ってはいけません、笑っちゃいけません、お父さん！」と、兄のほうがためりかねて口をきった。

「氣をつける、なんと高慢ちきな！ どうして笑っちゃいけないと言うんじやな？」

「そうですとも、たえお父さんだろうと、笑ったりなんかなさったら、ほんとに、ぶちのめしますよ！」

「いやはや、あきれた小倅だ！ なにに、この親父をやつつけるだつて？……」と言いながらタラス・ブーリバは驚いて、二、三歩うしろへ退った。

「たえお父さんであろうと仕方ありません。侮辱にたいしては、誰かれの容赦はしませんよ」

「おまえはわしと何で勝負する気か？ まさか殴り合いじゃあるまいな？」

「ええもう、何だつてかまうもんか」

「ようし、それじゃ殴り合いだ」と、両袖をまくり上げながら、タラス・ブーリバは言った。

「よし、おまえの腕前を試してやる！」

こうして父と子は、長らく相見なかったあとの挨拶のかわりに、あるいは後退して様子をつかがい、あるいはまたもや突進したりしながら、たがいに脇腹や腰や胸を目がけて拳骨の殴り合いをはじめた。

「あれま、見ておくれ、おじいさんったら惚けちまった！ すっかり氣が狂つちまいなさったのだよ！」と、敷居ぎわに立ちつくしたまま、かわいくてたまらないわが子たちをまだ抱擁することもできずにいた、青白く、瘦せぎすな、氣だてのやさしい母親が言った。「子供たちが家に帰って来たというに、一年あまりも会わずにいたというに、あの人ったら、思いつくにも事かいて、殴り合いを始めるなんて！」

「うん、こいつめ、なかなかどうして達者なものじゃ！」と、ブーリバは立ちどまって言った。

「確かに、立派なものじゃわい！」と、彼はちょっと衣服を正しながら続けた。「これなら別に試してみるまでもなかったわい。立派なコサツクになるじゃろうて！ さて、倅に挨拶じゃ！ 接吻を交わすしやう！」こうして親子は接吻をかわしはじめた。「あつぱれじゃぞ、倅！ わしを殴りつけおったように、誰でも叩きのめしてやるんじやな。誰かれの容赦はいらん！ それにしても、おまえはまた妙な飾りをつけとるな、そこにぶら下がってる紐はいったいなんじゃい？」ところで、こっちののつほめ、おまえはなんだつて突つ立ったきり両手をぶらさげ

「おるんじや？」と、彼は弟のほうをふり向きながら言った。「おまえは、臆病者め、なんでもわしに殴りかからんじや？」

「またそんなことを思いついて！」と、その間に弟のほうを抱きしめていた母親が言った。

「血を分けた子供に父親を打たせようなんて、またなんてことを考え出すんでしょね。それともこんな時でなければまだしも、幼い子供が長旅を終えて、疲れきっているというのに……」

「この子供、二十歳を越え、身の丈はちょうど一サージェン（メートル）もあったのだ。今はこの子をすこし寝かせてやり、なにか食べさせてやらなければならぬのに、あなたときたら殴り合いをさせようなんて！」

「ふん、わしが見たとおり、おまえは母さん子だな！」と、ブーリバは言った。「倅よ、母さんの言うことなぞ聞くんじゃない。母さんは」

女で、女は何も知りやせんのだ。おまえたちの慰みはなんだ？ おまえたちの慰みは——すがすがしい野原とすばらしい馬、それがおまえたちの慰みというものじや！ それ、このサーベルが見えるか？——これこそ、おまえたちの母親じやぞ！ おまえらの頭に詰めこまれているものは、みな碌でもないものばかりだ。神学校も、ありとあらゆる書物や読本も、哲学も——みんな、たわごとじや。わしはそんなものには、みな唾をひっかけてやるわい！……」

ここでブーリバは、とても印刷するわけにはいかない言葉をひとつ付けくわえた。「来週

にでも、おまえらをザボロージェ（ドネーブル下流五年まで存在したコサック軍の本拠）へ送り出すがよろうて。あそここの学園こそ本当の学園じや！ あそここそ、おまえらの学校がある。生きた知識を得られるのは、あそこだけじやぞ」

「それでは、この子たちは、たった一週間しか、家にはいられないというんですか？」と、目に涙をうかべて、やつれた老母は悲しそうに訴えるのだった。「それじや、かわいそうにこの子

たちは、ちよいと出歩いてみることもできない、生れた家の様子だって知る暇もありやしない。わたしだってこの子たちをしみじみ眺めてやることもできない！」

「もう好い、吠えるのはたくさんじや、婆さん！ コサックはな、女どもにかかり合っておるもんじやない。おまえはこの二人を自分のスカートの下に隠してしまつて、雌鶏が卵を温めるように二人を抱えこんでいたいのじやろうさあ、向うへ行つて、わしたちにありつたけの食物を食卓へ出してくれ。焼菓子とか、糖蜜菓子とか、けし粒菓子とか、そのほかいろんな甘

ったものはいらん。羊肉を全部ひっぱり出せ、山羊肉も出せ、四十年にもなる蜜酒もだ！ それに火酒（ウオツカ）もたっぷりとな。いろいろと手かげんしてない火酒を、乾しぶどうとか、いろんな下らない混ぜ物のはいいくない、間違いみたいに泡立ってしゅうしゅう沸騰する生のままの火酒をな」

ブーリバが自分の息子たちを居間へつれてい

くと、深紅のビーズの首飾りをつけて部屋を片づけていた美しい召使の娘が二人、素早くそこから逃げ出していた。娘たちは、おそらく、何びとをも容赦しない若旦那たちの到着にびっくり仰天したのか、さもなければ、ただ単純に、男を見ると金切り声をあげてあわただしく駆け出して、それから長いあいだ、激しい羞恥心のために袖で顔をかくしているといった、あの女性特有の習性をきちんと守ろうとしたのだろう。

居間は、すでにウクライナでもあまり歌われなくなつたが、鬚を垂れた盲目の老人が人々にとりまかれてバンドクーラ（ウクライナの多弦琴）の静かな調べにつれて語つた歌謡や叙事詩の中にだけ、ま

ざまざとその面影を残している時代の好みにしたが、——あの宗教合同（十六世紀末のロシア正教ライナと白ロシアの支配政策）にたいしてウクライナに小競合いや大決戦がさかんに起りはじめた苛酷な戦乱時代の好みにしたがって、飾られていた。部屋は全部きれいに色粘土で塗られていた。壁にはサーベルや、革鞭や、小鳥を捕る霞網や、漁網や、鉄砲や、巧妙に仕上げられた角製の火薬入れや、黄金の馬の轡のたぐいや、銀の記

章札のついた馬脚の縛り縄などが掛けてあった。居間の窓はみな小さくて、今では古い教会堂だけでしか見かけないような円い曇りガラスがはまっていて、上げ下げ式のガラスを押し上げないことには、外をのぞくこともできなかった。

窓や扉の周囲には赤い唐草模様がついていた。四隅の棚には、水差しやら、緑色や水色のガラ

ス製の大壺やフラスコやら、彫刻をほどこした銀製の台付大杯やら、あらゆる種類の金めっきの酒杯などが並んでいたが、それらはヴェネチア製（当時ヴェネチアはガラ）だったり、トルコ製だったり、チェルケス（コサック西部地方、コサック部族で有名）製だったりしたが、それはあの勇猛果敢な時代には至極ありふれたことで、三人も四人もの手を渡り、あらゆる道筋を経てブーリバの居間に納まったのだった。部屋の周囲にぐるりとしつらえられた楡の木、正面の角に安置してある聖像の下、巨大な食卓、色さまざまな花模様を描いた化粧煉瓦でおおわれ、上に寝棚がいくつもついていて、へこんだり出っ張ったりしている幅の広い暖炉、——これらはみな、毎年の休暇のたびに家へ歩いて帰って来たわが二人の若者にとっては、きわめて馴染みぶかいものであった。いつも歩いて帰省したというのは、それは彼らにはまだ馬がなかったからで、学生には馬に乗ることを許さない習慣があったからである。彼らにはただ長い前髪があるだけで、武器をたずさえたコサックなら誰でも、それをつかんで引きずりまわすことができたのだ。ブーリバは彼らの卒業に際してはじめて、自分の馬群の中から一対（二頭の）若い雄馬を彼らに送りどけてやったのである。

ブーリバは息子たちの帰宅を機会に、家に留まっていたのかぎりのすべての百人長（軍の曹長、百人隊長の職）と連隊の士官を全員のことらず呼び集めるように命じた。そして、それらの中の二

人と、彼の古い僚友である連隊副官ドミトリー・トフカッチがやってくると、彼はすぐさまその連中に向って、「そう、見てくださる、こういう若者たちじゃ！ 近いうちにセーチ（十六十八世紀のザボロジエ軍の本拠地）へ送り出すつもりですわい」と言いながら、息子たちを紹介した。客人たちはブーリバにも、二人の青年にも祝詞を述べて、それは何よりだ、若い人のためにはザボロジエのセーチにまさる学問はないと答えた。

「さあ、みなさん、どなたもお好きな席で食卓についてください。さて、倅ども！ まず最初に火酒で乾杯しよう！」——そう、ブーリバは言うのだった。「神よ祝福をあたまえ！ 達者でな、倅ども。オスタップ、おまえもな、アンドリー、おまえもな！ 神よ、どうぞ、この二人が戦いで、いつも幸運に恵まれますように！」

「邪教徒（昔の異教徒、特に回教徒に対する罵言）どもをみな打ち砕きますように、トルコ人どもを打ち破り、タタール人（十三世紀の蒙古侵入以来の蛮族、古来トルコ系諸民族の総称）どもをも打ち破り、ポーランドの奴輩（人に対する蔑称）どもがわれわれの信仰に反することをやり始めたら、リャーフどもを叩きつけてやりますように！」

さあ、酒杯を出せ。どうだ、すばらしい火酒じゃろうか？ ところで、ラテン語では火酒のことをなんと言ったかな？ そうそう、倅ラテンのやつらは大馬鹿者だったぞ。やつらはこの世に火酒というものがあるかどうかとも知らなかったのじゃ。ええっと、なんと言ったかな、あのラテン語の詩を書きおったやつは？ わし

は読み書きのほうはあまり強くないんでな、それで良くは知らんが、ホラチウス（詩人、紀元前六五）とかいったかな？」

「まあ、なんて親父だ！」と、長男のオスタップは腹の中で考えた。『なんでも知ってるくせに、古狸めが、まだそらとぼけている』

「わしが思うに、神学校の校長は、おまえたちに火酒の匂いも嗅がさなかったじゃろうて」とタラスは言葉をつづけた。「どうじゃ、倅ども、白状せい。おまえたちは背中とはもとより、コサックの体を全部とこぎりわす白樺の枝や桜の若枝の答で、こっぴどく殴られたものじゃろうか？ それとも、おまえらがもう、あまり生意気になりおったので、編み鞭で傷を負わされたともいうのかな？ たぶん、土曜日ごとだけではすまずに、水曜日にも木曜日にも、罰をうけたのじゃろうな？」

「無駄なことですよ、お父さん、過ぎ去ったことを思い出したって」と、オスタップはひややかに答えた。「過去のことは、過ぎ去ったことです！」

「いま、そんなことをやってしろ！」と、アンドリーが言った。「今こそ、誰でも指一本ふれてみるがいい。どんなタタール人のやつでも、たつたいま顔を出したら、コサックのサーベルがどんなものか思い知らせてやるぞ！」

「あっぱれじゃ、倅！ 実にあっぱれじゃ！ よし、そういうことなら、わしもおまえたちといっしょに出かけるぞ！ 誓って、わしも出か

けるぞ！ どうして、わしがこんなところで待っておらねばならんのじゃ？ わしが蕎麦そば時ときき（土地を持つていう農民）や家政管理人になつて、羊や豚の見張りをしたり、女房といちゃついているためなのか？ とんでもない、女房なんぞ消えてくたなれ。わしはコサックじゃ、そんなことはまっぴらだぞ！ いったい、どうして戦争がないんじやろうな？ わしはな、それだと、おまえらといふしよにザボロージェに行こうというのじゃ、慰みのためにな。誓つて、わしも行くぞ！」そして老いたるブーリバは、しだいに熱してきて、かっかとなり、ついにはまったく熱狂して、食卓から立ち上がると、勿体ぶつて足をとんと踏みならした。「明日にも出発だ！ どうして、ぐずぐずすることがある！ ！

どんな敵を、こんなところに坐りこんで待ちうけようというのじゃ！ こんな百姓小屋がわれわれにとつて何じゃ？ こんなものはみんな何になる？ こんな壺うなぞがなんじゃ？」こう言うなり、彼は壺やフラスコなどを叩き割ったり、ほうり出したりし始めた。

哀れな老婆は、夫のこうした振舞いにはとくに馴れつこになつていたので、腰掛こしに坐つたまま悲しそうに眺めていた。彼女はあえてひと言も口に出そうとはしなかったが、自分にとつてかくも残酷な結論を聞いている、あふれる涙を押えることができなかった。こんなあつけない別離におびえて、自分の息子たちをまじまじと見つめたが、——彼女の両眼とひきつったよう

に締めつけられた唇におののいているようにみえる、あの彼女の無言の悲しみの深さを残るくまなく描き出すことは、誰にもできないことだろう。

ブーリバは恐ろしく頑固な人物だった。それは重苦しい十五世紀に、ヨーロッパの半遊牧的な片隅にだけ発生した性格のひとつで、この時代は、原始的な南部ロシアの全土が領主たちに見棄てられて、狂暴な蒙古の掠奪者どもの襲撃のために荒れはて、根こそぎ焼きつくされた時代、家を奪われ屋根を失つて、ここに初めて人間が大胆不敵になった時代、恐ろしい近隣諸国と絶え間ない危険にさらされながらも、焼土の上に住居をかまえ、それらに直面することに慣れつこになつてしまつて、この世にどんな恐ろしいことがあるのか、それすら忘れてしまつたという時代、また、それは太古以来の平和な時代のスラブ魂が戦火の洗礼をうけて、コサック軍団——広大なロシアの自然が産み出した自由奔放な剛胆さのあらわれ——が形成された時代、またそれは、あらゆる河沿いの土地や、岸辺の勾配のゆるやかな格好の土地に、コサックたちが一面にばらまかれて、その数を知る者は一人もおらず、その総数を知らうとしたトルコ皇帝に向つて、勇敢な彼らの仲間たちが『誰がそれを知りましょう！ われわれの仲間は曠野一帯にまき散らされています。バイラークのあるところろ、コサックあり』（小さな丘のあるところには、かならずコサックが住んでいる）と答える

権利をもつていた時代でもあつた。それは、まさしく、ロシア魂の異常なる現われだった。それは打ち重なる災厄が火打石となつて、人民の胸の奥底から叩き出したロシアの力の現われだった。昔の封建諸侯の領地と、獵犬番や狩獵官がうようよしていた小都市にかわり、たがいに所領の都市を爭奪したり売買していた小諸侯にかわつて、異教徒の掠奪者どもにたいする共通の恐れと憎しみとによつて結束した荒っぽい村落や支営舎（ザボロージェ、コサック軍部、落（ザボロージェ軍団の部）が出現した。彼らの絶え間ない戦いと南船北馬の生活が、壊滅の脅威にさらされていたヨーロッパを激烈な侵略から、すいかにして救ひ出したかは、歴史によつて、すでに誰にも知られている事実である。たとえ遠く隔たつて微力ではあつても、領地を持つていた諸侯にかわつてこの広大な土地の主権者となつたポーランドの王族たちは、コサックの価値とそうした戦闘的な油断のない生活がもたらす利益を理解した。彼らはコサックを激励し、その配備をほめそやした。遠く離れた彼らの主権のもとに、コサック自身の間から選ばれた総領（ウクライナの首領）は、コサック軍部と支営舎を連隊と適切な軍管区に編成した。それは正規の常備軍ではなく、その姿を見た者は誰もいなかった。しかし、戦争とか総動員という場合には、すべての者が八日以内に、国王から支給されるわずかのチエルヴォーネツ（昔ヨーロッパ諸國の報酬を受け取つて、あらゆる武器に身を

固め、馬に打ちまたがって現われるのだった。そして二週間、どんな新兵徴集の方法も到底およびもつかないような軍勢が集結するのだ。ひとたび遠征が終ると——その戦士は牧場や耕地や、ドネーブル河の渡し場へ立ち去って、魚を捕ったり、商売をしたり、ビールを醸造したりして、またもとの自由なコサックに戻るのだった。その当時の外国人たちがコサックの並はずれた才能に驚嘆したのは当然のことだった。コサックが知らないような職業は一つもなかった。火酒の醸造、荷馬車の組み立て、火薬の製造、鍛冶や銃前師の仕事までやってのけて、そのおまけにロシア人だけにしかできないような無鉄砲な遊興にふけて、飲めや唄えの乱痴氣騒ぎをやらかしたり、——何から何までコサックのお手のものだった。戦争のときに出征する義務を負うものと見なされていた登録すみのコサックたち（ポーランド政府の登録簿に記入）のほかに、緊急の際には、いかなるときでも、騎兵義勇軍の大部隊を召集することもできたのだ。連隊副官たちがあらゆる村や町の市場や広場をねりまわり、荷馬車の上に突っ立って大声を張り上げ、こう怒鳴りさえすれば、それでよかった。『おい、ビールや火酒を醸造しておる諸君、酒をつくったり、暖炉裏の寝棚にころころして、脂肪ぶとりの体で蠅を養っておくのは、もうたぐさんだ！ 騎士の栄光と名誉を得るために奮い立て！ 犁を手にした諸君、蕎麦を播いておる諸君、羊の番をしておる諸君、女を追っかけ

ている諸君！ 犁の後押しをしたり、黄色の靴（コサックは普通山羊皮などに、色を染めた長靴をはいていた）を泥で汚したり、女どものあとを追っかけまわして騎士の精力を浪費するのは、もうたぐさんだぞ！ コサックの榮譽をかざる 때가来たのだ！』そして、こうした言葉は乾いた木材の上に落ちた火花のようなものであった。農夫は自分の犁を折り、火酒やビールの醸造者たちは大桶を投げ捨て、樽を叩きこわし、職人と商人は仕事も店も悪魔に送りどけて、家じゅうの壺をみな叩き割った。そして誰もかれもがみな馬にまたがるのだ。ひと言でいえば、ロシア民族の性格が、ここに力強く幅ひろい規模と強固な外貌を示すのだ。

タラスは初期の古い連隊長のうちの一人だった。彼の全身は戦争さわぎのために創られていて、その性格がぶっきらぼうで率直なことで知られていた。当時すでにポーランドの影響がロシアの貴族の間に現われはじめていた。多くの者がすでにポーランドの風習を真似て、贅沢品や、派手な服を着せた召使や、鷹や、狩猟係や、晩餐会や、庭園などを取り入れていた。タラスにはこれが気に食わなかった。彼はコサックたちの素朴な生活を愛していて、自分の同僚のワルシャワ側に傾いた連中をポーランドの貴族のおべっか使いだとののしって、口論した。つねに倦むことを知らずに、彼は正教（ロシアの正教）の正当な擁護者をもつて、みずからを任じていた。借地小作雇主（貴族地主から土地を借りて農民を働かせて耕作する小作人）の庄制や各戸の住民税の新規の増額にたいする

不平が聞えてきさえすれば、どんな村にも勝手に入っていた。そして自分の部下を引きつれて、みずから彼らに制裁を加え、次の三つの場合にはつねに一刀両断の処置を掟（きまり）としていた。——すなわち、収税委員（ポーランド政府に任命された税金係）どもが長老（ウクライナの土地の住民の指導者）たちを敬わずに帽子をかぶったままその前に立っていたとき、それから、正教を嘲弄して父祖伝来の信条に敬意をあらわなかった場合、最後に、敵が邪教徒とトルコ人であった場合、——それらに対しては、どんな場合にもキリスト教徒の名譽にかけて、武器を手にするのが許されているものと、彼は考えていた。

いま彼は、自分の二人の息子とともにセーチに現われ、『それれ見てくだされ、わしがここへ連れてきた若者がどんな奴だか！』と自慢する場面や、戦陣の間で鍛えられた古い同僚一同に兄弟を紹介する場面や、実戦教育と、同じく騎士の重要な資格のひとつと彼が考えている乱痴氣騒ぎの酒宴とで、息子たちが初陣の功名手柄を立てるのを目の前に見る場面を早くも想像して喜んでいて。彼は最初、兄弟二人だけを送り出そうと思っていたのだ。だが、彼らの潑刺とした姿、その背丈の高さ、力づよい肉体系を見ると、彼の軍人魂が急に燃え上がったのだ。そして彼は、その翌日すぐに二人といっしょに自分も出かけることに決めたのだが、そうしなければならぬ理由というものは、ただもう頑固一徹な意志だけであった。彼はもうあれこれと世

話をやいたり、指図をしたり、若い息子たちのために馬や馬具を選び出したり、馬小舎や納屋に顔を出したり、翌日彼らといっしょに連れ合いかなければならない部下の者を選定したりした。連隊副官のトフカッチに自分の権限を委任するとともに、もし自分がセーチからならかの指示を与えた場合には、すぐさま連隊全員を引きつけてくるようにと厳重に命令した。彼は一杯機嫌で、頭の中にはまだ酔いがまわっていたが、しかし何ひとつ忘れたものはいなかった。馬にたっぷり水を飲ませて、秣桶に大粒のいちばん良い小麦を入れてやるようにという指図までしておいて戻ってきたときには、いろんな心づかいのために疲れきってしまった。

「さて、子供たち、もう寝なければならぬ。明日はまた神の命じたもうことをするとしよう。いや、わしらに寝床を敷かなくてもいいぞ！わしらに寝台はいらん。わしらは庭で寝ることにしよう」

夜はまだやっと空をつつんだばかりだったが、ブリーバはいつも早くから床についた。彼は毛氈のうえに体をのばして横になると、羊の毛皮外套にくるまったが、それは夜気がかなり冷たかったし、またブリーバは家にいるときには少し温かめにくるまるのが好きだったからでもあった。彼はすぐさま、いびきをかきはじめた。そして庭じゅうがそれにつづいた。庭のあちこちの隅に寝ころんだ者がみんな、いびきをかいたり、唄うような音を立てはじめた。まっさき

に寝こんでしまったのは夜番だったが、それは若旦那たちの到着を祝って誰にもまして飲んだくれてしまったからであった。

かわいそうに母親だけは眠らなかつた。彼女は、枕をならべて寝ている愛しいわが子たちの枕もとにかがみこんだ。彼女は無頓着にもつれたままになっている二人の若々しい卷毛を櫛ですいてやり、あふれる涙でそれをぬらした。彼女は両眼に全霊をこめて彼らを見つめ、すべての感情をこめて眺め入り、からだ全体を目に変えたが、いくら見つめても見飽きることはなかった。彼女は自分の乳房で二人をはぐくんだ、彼女は二人を育て上げ、いつくしんできた、——それなのに、二人を自分の目の前にすぎないることができるのは、ほんの束の間（ほんのつかの間）にすぎないのだ。『あたしの子供たち！あたしの愛する子供たち！これから先おまたえたちはどうなるんだらう？いったいどんなことが、おまたえたちを待ちうけているのかしら？』と彼女はつぶやいた。かつては美しかった彼女の顔をすっかり変えてしまった皺の間に涙の玉がふるえた。実際、彼女はあの勇猛果敢な時代のすべての女性と同様にみじめだった。彼女は、情熱の火の燃えさかった最初の間だけ、青春の血潮の沸きかえった最初の間だけ、ほんの瞬間を恋に生きただけで、——残酷な彼女の求愛者は早くもサーベルと、仲間たちと、乱痴気さわざのため、彼女を見すててしまった。彼女は一年のうちに二日か三日、夫の顔を見るだけで、それか

ら何年もの間、風の便りさえ耳にしなかつた。そのうえ、夫と久しぶりに顔をあわせて、二人でいっしょに暮すことになったとき、彼女の生活はいったいどんなものだったらう？彼女は毎辱に耐え、打ち殴られることにさえ耐えた。彼女が見たのは、ほんのお情けのうわべだけの愛撫にすぎなかつた。気随気ままなザポロージェがその峻厳な刻印をきざみつけたこの独身の騎士たちの集団の中では、彼女はなんとも奇妙な存在だった。青春は快楽も知らずに彼女の目の前をきらめき過ぎて、彼女の美しくみずみずしい頬と乳房は接吻もされずに色あせて、年齢に似合わず老いこんだ皺（しわ）につつまれてしまった。すべての愛、すべての感情、女性の中にある優しく熱烈なもののすべてが、彼女の中にある優ただ一つの母性愛と化してしまつた。彼女の心は熱烈に、情愛をかたむけ、涙とともに、曠野の鷗（う）のようにわが子の上を翔けめぐつた。その息子たちが、彼女のかわいい息子たちが彼女の手下に奪われるのだ、永久に二人を見ることができないように奪い去られるのだ！誰が知らう、最初の戦いでタートル人が二人の首を打ち落すかもしれないのを。そして二人の死体がどこに打ちすてられて横たわっているのか、路傍の猛禽がしばみ荒らしても、彼女はそれを知ることもしないだらう——母は、二人の血の一滴にすべてを投げ出そうとしているのに。むせび泣きながら、彼女はさからいがたい睡魔がすでに閉ざそうとしている二人の瞳（ひとみ）に入つて、

思うのだった。『もしかしたら、プーリバは出発を二日ぐらいい延ばしてくれるかもしれない。あの人は、あんまり飲みすぎたものだから、こんなに早く出かけようなんて考えついたら、これはないから』

月は中空から、眠りについた人々でいっぱいになった庭じゅうと、柳の木のコムリとした茂みと、庭にめぐらした棒杭の柵をうずめて生い繁った丈の高いブリーヤン草を、もうずっと前から照し出していた。彼女は愛するわが子たちの枕辺にずっと坐りつづけて、一瞬たりとも二人から目をなさず、眠ることなどは考えもしなかった。もう馬どもは夜明けの気配に気づいて、みんな草の上に横たわり、秣を食うのをやめた。柳の梢の葉がささやきはじめ、そのささやきの流れは葉末をつたわって、しだいに最後の下枝まで滑り下りてきた。彼女は夜明けまで坐り通していたが、まったく疲れもおぼえずに、夜ができるだけ長くつづくようにと、心ひそかに願っていた。曠野のほうからは甲高い仔馬のいななきが伝わってきて、暁の紅色の縞があざやかに空にきらめいた。

プーリバが突然目を覚まして、跳び起きた。「さて、若者ども、眠るのはもうたくさんじや！ 時間だ、時間だ！ 馬どもにたっぷり水をやれい！ とところで、婆さんはどこじやな？ (彼はいつも自分の妻をそう呼んでいた) 急いで、婆さん、わしに食事の用意をしてくれい。道中は長いんじゃない！」

哀れにも老婆は、最後の望みも失い、悲しうに重い足どりで家の中へ入っていった。彼女が涙ながらに朝食に必要なものを全部用意している間に、プーリバはいろいろ指図をし、馬小舎にはいりこんで、自分の子供のために、みずから最上の馬具裝飾用の布を選び出してやった。宗教学校生徒の姿は急に面目を一新した。以前の汚れた長靴のかわりに銀でふちどりの底金を打った赤いモロッコ革の長靴をはき、黒海ほどの広さの広ズボン(モロッコの特産品。ズボンの裾は長靴の中へはさく)には髪や折り目が一千本もついていて黄金の撚り紐のバンドで固く締められ、そのバンドにはパイプ用のブラシや、そのほか飾りの小鈴がいくつもついた長い革紐が何本となくぶらさがっていた。燃えさかる火のように色あざやかな赤いラシヤの短外套(背にひだ飾りのあるホ)は模様のついた飾り帯で締められて、その帯の間には刻印細工を施こしたトルコ製のピストルが押しこまれ、サーベルが足に当ってがちがちや鳴った。二人の顔はまだほとんど日焼けしていないので、さらに美しく、色白に見えた。若々しい黒い口ひげが今ではなにか、彼らの色白の皮膚と健康で堂々たる青年の顔色をさらにはつきりと際立たせていた。頂上が金色の、黒い羊皮の帽子をかぶった彼らはすばらしかった。かわいそうな母親よ！ 彼女は二人の姿を見つめながら、ひと言も口をきくことができず、そして涙は目にたたえられているのであった。「さて、倅ども、用意はすべてととのったぞ！

ぐずぐずすることはない！」と、ついにプーリバが言った。「だがまず、キリスト教徒の習慣どおり、門出の前に、一同そろって、ひざまずかねばならんじや」

扉のところにうやうやしく立っていた部下の若い者にいたるまで、みな一斉にひざまずいた。「さあ、母さん、子供たちを祝福してやるがよい！」とプーリバは言った。「二人が勇敢に戦って、いつも騎士の名譽を守るように、いつもキリストの信仰のために立ち上るように、さもないときには——いっそのこと死んでしまい、二人の魂もこの世に跡かたも残らないようにと、神に祈ってやるんじゃないや！ さあ子供たち、母さんのところへ行け、母親の祈りは、水の上でも陸の上でも救いの力があるものじや」

世のすべての母親のように弱々しい母親は二人を抱擁し、二つの小さな聖像を取り出して、むせび泣きながら、それを首にかけてやった。「おまえたちをお守りくださいますように……聖母さま……。お忘れでないよ、息子たち、この母を……ほんのひと言でも便りをしておくれ……」それ以上は、彼女は話すことができなかつた。

「さて、出発しよう、子供たち！」とプーリバが言った。

表階段の脇には、鞍を置いた駒が立ち並んでいた。プーリバが自分の「悪魔号」に跳び乗ると、そいつは二十ブード(三百二十七・六キロ)と、そいつは十六・三八キロ(三百二十八・六キロ)もの重荷を背負わされたのを覚えて、狂暴に跳

び退いたが、それはタラスが非常に重くて肥^{ふと}っていたからであつた。

母親は自分の息子たちもすでに馬上の人となつたのを見ると、なにかしら兄より優しそうな表情が顔立ちに現われている弟のほうへ飛びついていった。彼女は鍔^{あぶら}に取りすがり、その鞍^{くら}にびったりと身をよせ、目には絶望の色をうかべて、彼を自分の手からはなそうとしなかった。

二人の屈強なコサックが彼女をそっと抱きかかえて家の中へ連れていった。しかし一同が門の外へ乗り出したとき、彼女は、その年齢に不似合いな、野生の雌山羊そのまゝの身軽さで門の中から駆け出して、不可思議な力で馬を引きとめ、なにか狂人じみた無我夢中の激情をもって、息子の一人を抱きかかえた。彼女はふたたび連れもどされた。若い二人のコサックはうなだれて駒を進め、父を恐れて涙を押えていたが、父親のほうもまた、色には出すまいとつとめながらも、やはりいくぶん心を乱されていた。灰色の曇り日で、青草があざやかに輝き、小鳥たちは、なんだか調子はずれの声でさえずっていた。彼らはしばらく駒を進めてから、後ろをふり返つた。彼らの部落は大地に埋まつてしまつたように思われて、わずかに地上に見えるのは彼らの質素な家の二本の煙突と、かつて彼らがその枝々を栗鼠^{リス}のようによじ登つたことのある木々の梢だけだつた。ただひとつ、はるかな草原だけがまだ彼らの前に広がつていて——この草原から——、彼らは自分たちの生活の歴史のす

べてを——その露にぬれた草の上をころびたわむれた時代から、その草原の中で、眉の黒いコサック娘がおどししながらもみずみずしい素早い足にまかせて草原を横ぎつて飛んで来るのをじっと待つていた時代にいたるまでの、すべてのことを、想いにかへることができた。見れば、すでに荷車の車輪を上にしぼりつけた井戸の竿^{さき}が一本、淋しく空に突き出ているだけだつた。彼らがすでに越えてきた平原は、遠くからは山のように見えて、すべてのものを隠してしまつた。——さらば、幼かりし日々よ、数々のたわむれよ、そして何もかも、何もかも！

二

三人の騎士は、みな黙りこくつて進んでいった。老いたるブーリバは遠い昔のことを考えていた。その全生涯が永遠に青春であつたらと願っているコサックがいつも哀惜する歳月が、遠く過ぎ去つた歳月が、あの青春のころが、彼の目の前に次々に浮んでは消えていった。彼はセーイチで、昔の仲間たちのうちの何人ともぐり会えるだろうかと思つてた。もう死んでしまつた者は誰と誰か、まだ生きてゐる者は誰と誰だろうか、彼は数えてみた。彼の瞳に涙がそうと浮んできて、その白髪頭はがっくりとうなだれた。

彼の息子たちは、また別の物思いにふけていた。だが、この息子たちについては、もうすこし話しておかなければならない。彼らは十二

歳になるとキエフ^{アウグダヤ}の神学校へ入れられた。その当時の名譽ある社会的地位を占めていた人々はみな、どうせあとになればそんなものはすっかり忘れてしまふようになるのだが、自分たちの子弟に教養をあたえるのは親の義務だと思つていたからであつた。その頃の二人は、宗^{リト}教学^{リト}校へ入学してくる者がみなそうであつたように、野育ちのままの人馴れしない子供だつた。しかし、そこでいくぶんかの修練をつむと、彼らをたがいに相似通つた者にしてしまふ、ある共通なものを身につけてしまふのが通例であつた。兄のオスタップは、まだ入学したばかりの最初の年に逃げ出したことから、その経歴をかざり始めた。彼は連れもどされ、残酷に鞭うたれて、わりやり本の前に坐らされた。四たび彼は自分の読本を土に埋め、四回とも人間わざとも思われないほどの、さんざんな目にあわされて、新しい読本を買ひあたえられた。だが彼の父が、もし神学校の全課程を修了しなければ、まる二十年間、使丁として修道院へほうり込んでしまふぞと厳肅に宣誓して、生涯ザポロジエを見ることも許さないぞと警告しなかつたら、疑いもなく、彼は五回、同じことを繰り返かえしたにちがいない。あらゆる学問をのしつて、前述のように、そんなものを学ぶ必要は全然ないといふ子供たちに忠告した、その当のタラスがそんなことを言つたのだから面白い。このときから、オスタップは異常な勤勉ぶりを發揮して退屈な書物を前にしても坐るようになり、たちまち優

等生と肩を並べるようになった。当時の教育法は恐ろしく實際生活から駆け離れたものであった。そのスコラ哲學的、文法學的、修辭學的、論理學的な精妙さは、まったくその時代とは没交渉で、けつして實生活に適用されたり反復されたりするものではなかった。それを学んだ者は、たとえ比較的スコラスチックでない学問でさえ、何事にも自分の知識を応用することができなかつた。衆に拔きこんでた当時のもっとも學識の深い者ほど、経験からまったく遠ざかつていたために、無知であつた。そのうえ、あの寄宿舎の共和制的な制度といい、あのおそろしく多人数の若くて、頑丈で、健康な連中の集まりといい、——それらのすべてが彼らに、自分たちの學業とはまったく別の活動舞台があることを暗示したのに相違ない。あるいは貧弱な給食、あるいはたびたびの絶食の罰、あるいはまた、すがすがしくて健康で、頑丈な青年の内部に目覚めるさまざまな欲求、——それらのすべてが一つになつて、後日ザボロージェで發達した、あの進取の氣象を彼らの中に生みつけたのである。空腹をかかえた寄宿舎生はキエフの街々をほつきまわつて、すべての人々を警戒させた。市場に坐っている物売りの女たちは、通りすがりの神学生の姿を見かけさえすれば、いつも、まるで雌鷲が自分の雛を抱えるように、両腕で饅頭や輪パンや南瓜の種をおおいかくすのだった。その義務として、自分の配下の仲間たちを監視しなければならぬ監視委員（最上級生の優等生が任命さ

れ）自身が、自分の広ズボンに、ぽかんとしている物売り女の店をそっくりそこへ入れてしまえるような、おそろしく大きなポケットをつけていたのである。この神学生たちはまったく別の世界をつくつていて、ポーランドとロシアの貴族たちで構成されている上流社会へ足を踏み入れることは、彼らには許されていなかった。總督のアダム・キセーリ（ウクライナ貴族の出身一六六に仕えてキエフ地方の總督となり、ポダイル政府の反乱時にコサツクをポーランド政府と和解せよとした）自身、神学校を公然と庇護していたにもかかわらず、神学生を上流社会へ立ち入らせずに、彼らをさらに嚴重に取り締まるように命令していた。しかしながら、この訓令はまったく余計なものだった。それというのは、校長（修道僧の間か）と教授たる修道僧たちは枝答や革鞭を惜しまなかつたし、彼らの命令によつて、しばしば懲罰委員（監視委員の助手）たちが自分たちの監視委員どもを、二、三週間ものあいだ広ズボンの上から体をさすつていなければならないほど、こっぴどく打ちのめしたからである。連中のうちの大多数にとつては、そんなことはまったくなんでもないので、上等のウォツカに胡椒を入れたのよりは少しばかりきついな、といったところだった。一方、とうとう、このような絶え間ない「電法」にすっかりうんざりさせられた他の連中は、うまく道を見つけ出すことができて、その道中で追つ手につかまらなければ、ザボロージェへ逃げこむのだった。オスタップ・ブリーバは、大いに發奮して論理学や神学さえ学びはじめたの

に、どうしても容赦ない答刑（ちがひ）を免れることができなかった。こうしたことがみな、何かしら性格を強情なものにして、いつもコサツクを際立たせているあの不屈の精神を彼に伝えずにはおこなかつたのは、まことに自然なことだった。オスタップはいつも優秀な仲間の一として認められていた。彼は他人の庭園や菜園を荒すような横着な計画では、仲間を指揮することはあまりなかつたが、そのかわり彼はいつも、勇敢な神学生の旗印のもとに真先に駆けつける一人だった。そして、どんな場合にも、自分の仲間たちを裏切つたことはけつしてなかつた。どんな鞭でも棒でも、彼にそんなことをさせることはできなかつた。彼は戦闘と乱痴氣騒ぎの酒宴以外は、ほかの連中の煽動にたいして冷淡で、少なくとも、ほかのことは、ほとんど一度も考えたことがなかつた。彼は自分の同輩に対して誠実だった。彼は、その当時における、このような性格にだけしかありえなかつた、特殊な私たちの善良さの持ち主だった。彼は哀れな母親の涙に心から感動した。そして、この一つのことだけが彼の心をかき乱し、深い物思いに頭をうなだれさせたのだった。

彼の弟のアンドリーは、兄よりいくらか活潑で、何かもっと成熟した感情の持ち主だった。彼は、重々しく強烈な性格に普通に見られるような緊張ぶりなど少しも見せずに、進んで樂に勉強した。彼は自分の兄よりも才走つていて、しばしば、かなり危険な企ての主謀者になつた

が、それが兄のオスタップだったら、なんの思慮分別もなく、お慈悲を願うことなどまったく考えもしないで、自分の長上衣をかなぐり捨てて床の上のころがるところでも、持ちまへの機知縦横の才気のおかげで、ときには、そうした体刑を言いのがれることができた。彼もまた勲功を立てたい野心に燃え立っていたが、それと同時に、彼の心はほかの感情にも傾きやすかった。彼が十八のとしを越したとき、恋愛への憧れが急にその胸に燃え立った。女の姿がしばしば彼の舞けつのような空想の中に現われはじめた。彼は哲学の論議を聞きながら、絶えず、みずみずしい、黒い瞳の、優しい女の姿を思いうかべていた。彼の目のまえには絶え間なく、あでやかな、むっちりとした女の乳房や、優しく、美しく、肌もあらわな腕がちらついていた。その処女らしく、また生氣にみちた肢体にまつわる衣裳そのもののまでが、彼の空想の中では、なんとも言うに言われぬ、ある甘い情欲で息づいていた。こうした情熱的な青春の心のときめきを、彼は用心ぶかばか、自分の仲間たちから隠していた。なぜならば、当時は、戦争の味も知らずに、女や恋愛のことを考えるのは、コサツクにとつて恥辱であり、不名誉だとされていたからである。一般的に言えば、在学中の最後の二年ほどは、彼が何事かの徒党の首領になることはまれになり、ただひとり、どこか桜の園にうずもれた淋しいキエフの裏通りの、ひくい家並みが魅惑的に通りを眺めているその間をぶら

つくことが、たびたびであった。ときには彼は今では「旧キエフ」と呼ばれて、小ロシヤとポーランドの貴族が住んでいた、少し奇妙な建て方をした家が並んでいた貴族の街へ入り込むこともあった。あるとき、彼はぼんやり立ちどまって眺めていて、どこかのポーランド貴族の箱馬車にあやうく轢かれるところだった。おそろしく峻めしい口ひげをはやして馭車台に坐っていた馭者が、長い編み革鞭で彼をかなり正確にねらい打った。若い神学生はいきり立った。狂暴な大胆さで彼はその力づよい手をのばし、後輪をつかんで箱馬車を引きとめた。ところが、後難を恐れて馭者が馬どもにひと鞭くれたので、馬どもは急に動きだし——アンドリーも幸い手を離すことはできたが、地面につんのめって、まともに顔をぬかぬかの中へ突っ込んでしまった。おそろしく甲高い、音楽のような笑い声が、彼の頭上にひびきわたった。彼が目を見て見ると、生れてからまだ一度も見たことのないような美人が窓ぎわに立っていた。目が黒くて、朝日を浴びて薄紅に染まった雪のような色白の美人だった。彼女は心の底からおかしそうに笑った。そしてその笑いが目もくらむばかりの美しさに、輝かした力をそえていた。彼はぼろろとなつてしまった。彼はその女を見つめながら、すっかりどぎまぎして、うっかり顔の泥を拭きとろうとしたが、それは、さらに泥を塗りたくることになってしまった。この美人は、いったい何者だろうか？ 若い琵琶法師が弾奏し

ているのを取りまいて、門前に群がり立っている立派なお仕着せを着た召使たちから、彼はそれを問いただそうとした。だが召使どもは彼の泥だらけの顔を見て笑い声をあげ、彼に答えようともしなかった。やがて彼は、それがしばらく滞在中のコーブノ(今のリトアニア共和国のカーウナス市)の総督の娘であることを、ついに探り出した。するとすぐその翌晩、神学生だけが持っている独特の大胆さで、木柵をぐぐりぬけて庭園に侵入し、家の屋根の上に枝を張り広げている木によじ登り、木から屋根へ乗り移り、壁炉の煙突をぐぐりぬけてまっすぐに、ちょうどこのとき、蠟燭のまえに坐つて高価なイヤリングを両耳から外していたあの美人の寝室へ忍びこんだ。美しいポーランド娘は突然目のまえに現われた見知らぬ男を見ると、あまりの驚きにひと言も声を立てることができなかつたが、しかし、一人の神学生が気おくれして指一本動かそうともしないで、目を伏せたまま突っ立っているのに気がつき、そして、それが自分の目の前の街路でばったり倒れた、あの当の神学生であることがわかったとき、笑い声がふたたび彼女の口から響きわたった。そのうえ、アンドリーの顔立ちには恐ろしいところは何もなかったし、それどころか、彼は大変な美男子だったのである。彼女は心の底から笑い出して、それから長いこと彼を慰みものにして楽しんだ。この美人は、ポーランド娘がみなそうであるように、軽薄なところがあったが、彼女の眼差は——刺しつらぬくよう